様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２００７０

研究課題名（和文）ソ連農村ミュージカル映画の巨匠イヴァン・プイリエフ研究

研究課題名（英文）Ivan Pyr'ev and Rural Musical Comedies in the Soviet Union of the Stalin Era

研究代表者
田中　まさき（池田まさき）（TANAKA, Masaki）

東京大学・人文社会系研究科・研究員

研究者番号：３０６００１８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円、（間接経費）　　480,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ソ連の映画監督イヴァン・プイリエフを扱い、とくに1940年代末から50年代初めにかけての彼の創作活動に注目した。農村を舞台とするミュージカル・コメディの傑作『クバン・コサック』を分析し、学会報告を行った。また『クバン・コサック』の成功後にプイリエフが取り組んだ歴史映画『イヴァン雷帝（未完）』の製作プロジェクトに着目し、とくにシナリオ原稿を基に分析を行い、学術論文を執筆した。

研究成果の概要（英文）：My presentation at the annual meeting of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature, "The Representations of the Post-War Kolkhoz in Ivan Pyr'ev's Kuban Cossacks," focused on the representations of fieldwork in Pyr'ev's 1949 film. While his former films express Soviet ideology by depicting struggles in everyday work, Kuban Cossacks is characterized by amusing elements at the fair, with fieldwork undertaken in a symbolized manner, thus suggesting the realization of a utopian society.
My paper "The Figure of Ivan the Terrible in an Unrealized Project of I. Pyr'ev" analyzes archival materials kept in the RGALI on Pyr'ev's little-known scenario of the Tzar. This paper shows Pyr'ev's aim in his plan to depict a new hero who was more suited, in contrast to S. Eisenstein's hero, to the norms of Soviet culture.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：ソ連　社会主義リアリズム　ミュージカル・コメディー　農村共同体　スターリン批判　映画

１．研究開始当初の背景

（１）研究の学術的背景

近年のソ連文化研究においては、大衆文化に対する関心が盛り上がりを見せている。とくにスターリン時代の大衆文化は、その後のソ連文化の原型として、欧米の研究者によって精力的に分析がなされている。だが、そこでの研究の視角には、少なからぬ偏りが見られる。すなわち、スターリン時代の大衆文化は、文化・芸術としての内容が問われるのではなく、社会統合を進めたという機能面のみに即して、分析がなされているのである。他方、近年のロシアにおける研究状況を見るならば、大量の情報を取り扱う点にその長所が見られるが、逆に研究対象を絞り込めないことから、しばしば議論は総花的なものに陥っている。

（２）研究者の研究背景

これに対して研究者は、社会的な機能に着目する欧米の研究から学びつつも、スターリン時代およびその前後のソ連文化を、あくまで作品世界の内的な論理に即して分析する方法を、追求してきた。その過程で研究者は、ソ連の芸術作品、とくに大衆文化において、農村世界の表象が重要な役割を果たしていることに着目した。ソ連の大衆文化において農村世界とは、現実の農村を描写したものであるよりも、あるべき理想の秩序を描き出すユートピアとして表象されているのである。そうした表象は、社会統合の機能を果たすばかりでなく、個々の芸術家による理想の追求のあらわれなのでもあった。同時にまた、ソ連の大衆文化におけるそうした農村の表象とは、広範な読者・観衆が求める理想の姿とも、共鳴していたのである。ソ連の大衆文化史において、そうした農村世界像をもっとも完成された形で創造し、かつ観衆の支持をかちえた芸術家こそが、映画監督イヴァン・プイリエフなのである。

研究者はこれまですでに、ロシアのアーカイヴ所蔵の未公刊資料をも用いながら、スターリン時代を中心にして、プイリエフの創作活動を分析してきた。その過程で、プイリエフによるロシアの「ナショナルな」描写の模索、また、古いものと新しいものの対立を超えたジンテーゼとしてのソヴィエト農村像の追求といった、重要な論点を見出してきた。

２．研究の目的

現役当時に博した人気にもかかわらず、今日ではプイリエフの個々の作品に関する分析はとぼしい。それは、プイリエフが大きく成功を収めたのがスターリン時代だったために、後年の研究者が彼の作品を過度に政治化した観点（「プイリエフは過酷な現実を美化するのに貢献した」など）から捉えるようになったからである。

プイリエフがそのキャリアの絶頂を迎える 1940 年代後半から 50 年代の初めまでの期間は、大祖国戦争のあとの後期スターリン時代と区分されるが、この時代は、ほかの時代と比べてもソ連文化史研究が特に手薄の状態にあり、不明な点も多い。さらに、スターリン時代の末期の文化は、その後に続く「雪解け」時代の反動的な流れの中で位置づけられ、中立の観点からの再評価を受けることが難しくなったきらいがある。当時の娯楽映画の巨匠であったプイリエフの作品を分析することで、同時代の文化的規範のあり方を明らかにできれば、ソ連文化史研究全般に寄与することも可能であろう。

（１）『イヴァン雷帝』を主人公とする映画の全容解明

1951 年からプイリエフによって企画が進められたものの、未完成のままに終わった『偉大なるルーシのために』は、16 世紀のロシアの皇帝イヴァン雷帝を主人公にすえている。これは後期スターリン時代の末期に起こった、映画製作の本数増大を目的としたカラーフィルムによる名作映画のリメイク計画を背景としている。エイゼンシュテインの死後、彼の『イワン雷帝』第 2 部が公開され

ない状況が続く中、同じ歴史上の人物を主人公とする映画のカラー版リメイクとして構想されたものである。それまでプイリエフが主に製作してきた農村を舞台とするミュージカル・コメディーとの共通点、当時のソ連における歴史認識の影響、さらに一般民衆の求める雷帝像や社会像との照応関係などが、分析の対象となる。

（２）『クバン・コサック』（1949）の分析

この作品は、大祖国戦争後のソヴィエト農村の荒廃を糊塗した作品として知られている。だが、そこに描かれた農村像は、階級対立を超えた「無葛藤」の世界の表象なのであり、当時のソ連社会の公式世界観のみならず、民衆の理想の社会秩序とも共鳴していた可能性がある。この点にとくに着目して、アーカイヴ資料に基づき本作品の分析を行なう。

３．研究の方法

（１）『イヴァン雷帝』の再映画化プロジェクトについて

プイリエフの『雷帝』プロジェクトに関する公刊資料はほとんどなく、情報はアーカイヴに収蔵されている一次資料に限られる。これまでの研究によって得られた資料を基に、2010 年 10 月のロシア史研究会大会に報告を行なった際の議論を参考にすることで論考をさらに深め、学術論文の形に仕上げた。また、プイリエフはシナリオ制作にあたり、V. コーストゥイレフが大祖国戦争中に執筆し、戦後も通俗的な人気を博していた長編小説『イヴァン雷帝』3 部作を参考にしている。この原作小説を文学研究の手法を用いて分析し、シナリオで表現された雷帝像と照合した。

（２）『クバン・コサック』について

『クバン・コサック』（モスフィルム、1949 年製作）はプイリエフにとって、農村を舞台に展開するミュージカル・コメディーの諸作品の中でも頂点であり、最後のものともなった、意義深い作品である。特に以下の点に注目し、研究を進めた。

①プイリエフのミュージカル・コメディー諸作品において形成されてきた、「無葛藤＝ジンテーゼ」的世界の完成。

②戦前の作品において追求されてきたソヴィエト農村における「完全な幸せ」のモチーフの完成と帰結。

③『クバン・コサック』には画面構成上、構成主義などのアヴァンギャルド芸術の影響が見てとれ、革新的な芸術が大衆映画に取り込まれたといえるが、この点についてのプイリエフの狙いを解明する。

さらに『クバン・コサック』の成功を受けて、1952 年にはプイリエフの創作についてまとめた本『人民芸術家イヴァン・プイリエフ』が出版された。この本の記述を踏まえて、同時代人の意識がプイリエフ作品のどこに向けられていたのか、評価のポイントを明らかにした。

（３）ソ連映画とプイリエフについて

2014 年 3 月に来日したマクシム・パヴロフ氏（ロシア国立中央映画博物館　副館長）を囲む会合に出席し、プイリエフ研究についての助言を得た。プイリエフによる『イヴァン雷帝』のリメイクについて、シナリオなどの文字資料以外にも周辺資料が残されており、一部が博物館で収蔵されていること、また『クバン・コサック』についても撮影のためのスケッチなどの資料が保管されていることなどの教示を受けた。

４．研究成果

（１）平成 23 年度には、論文『イヴァン・プイリエフの幻の『雷帝』プロジェクト』を執筆し、学術雑誌「ロシア史研究」第 89 号において発表した。この論文は、本研究の中核をなす重要な論旨を含むものである。

プイリエフについての本格的な研究はロシア本国においてもいまだほとんど見られないだけでなく、ほとんど知られていない映画プロジェクトを論じた本論は非常にユニークである。さらにプイリエフが新たに作り

出そうとした「雷帝」像は、ソヴィエト文化の規範にのっとりながらも、旧来のソヴィエト文化のイメージを肯定的に覆している点で新しいものである。

（２）①平成 24 年度は、研究計画にのっとり映画『クバン・コサック』の分析に取り組んだ。分析にあたっては、次のような点に注目した。第１にプイリエフが構築した世界像の独自的展開である。戦後スターリン時代に製作されたこの映画では、戦前から一連の娯楽作品群においてプイリエフが展開してきた作品世界の到達点が、大祖国戦争をはさむ形で示されている。これまでの研究の成果を踏まえることで、『クバン・コサック』の完成度を測ることができる。

第２にプイリエフ独特の物語手法の完成である。『クバン・コサック』は理想的社会を描出したことで、戦後ソ連の人々の目を同時代の厳しい現実から逸らし欺いたとする後世の批判を招いた一方、フィクションとしての物語は神話的な別の次元に昇華している。同時代の他の映画作家の作品と比較することでより明白となるが、実はプイリエフの場合、ソヴィエト社会の事実を物語に取り込みながらも、「ソ連的」なものを超えた普遍的な物語を志向し、成立させることに成功している。

②平成 25 年度は、これまでの研究を踏まえて、プイリエフの代表作である『クバン・コサック』についての学会発表を行った（日本ロシア文学会、東京大学、平成 25 年 11 月 2 日）。

本報告では、スターリンの生前 1952 年に出版され、『クバン・コサック』についても論じている『人民芸術家イヴァン・プイリエフ』を元に、フルシチョフによる批判以前に、同時代人が同作品をどのように評価していたのかを明らかにしようとした。それにより、プイリエフの創作史における『クバン・コサック』を位置づけなおすとともに、この作品の到達点を再確認することができた。

また本報告では、プイリエフが戦前の作品から得られた経験を踏まえた上で、『クバン・コサック』において何を描いているかに着目した。その際に注目したのは、作中の労働の表現である。この作品は企画段階から、収穫の後の市、祝日における人々の楽しみを描くことを主眼としていたため、作中で描かれる労働と娯楽の表現のバランスは、娯楽に大きく傾いている。これは戦前の作品群が、主に労働のシーンを通じて物語が展開するのとは、性格を異にしている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）
1.田中まさき、「カルバウスキスとモスクワ演劇界最近 10 年の動静」、『現代文芸論研究室論集れにくさ』、査読有、第 3 号、2012 年、111-129 頁。
2.田中まさき、「イヴァン・プイリエフの幻の『雷帝』プロジェクト」、『ロシア史研究』、査読有、No.89、2012 年、40-55 頁。

〔学会発表〕（計　1 件）
1.田中まさき、イヴァン・プイリエフ『クバン・コサック』における戦後コルホーズの形象、日本ロシア文学会、2013 年 11 月 2 日、東京大学。

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
田中　まさき（TANAKA, Masaki）
東京大学・大学院人文社会系研究科・研究員
研究者番号：30600184

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：